

第26回新人シナリオコンクール応募作品

タイトル 島のバラード

李向

登場人物表

木村武（30）鈴木水産経営者

由実（30）木村の妻

比嘉佳子（32）スナツクのママ

鈴木莉奈（16）高校一年生

王大力（29）オウダリ中国人の技能実習生

山内亮平（16）莉奈の友達

趙鵬（26）チョウペン中国人の技能実習生

鈴木健治（70）鈴木水産元経営者

鈴木伸一（40）莉奈の父

鈴木直子（40）莉奈の母

岡田一郎（70）岡田水産経営者

小倉太郎（70）漁協の会長

石巻市 コンビニ・中

木村武（３０）、しゃがんで隅の棚にジューズを補充している。

ドアのベルが聞こえる。

武「いらつしやいませ」

と補充しながら、挨拶する。

男の声「木村くん」

武、振り返ると、後ろに漁協の小倉太郎（７０）が立っている。

武「小倉さん……」

と立ち上がる。

武「何か、用事ですか」

小倉「昼休憩は済んだ？」

武「いいえ」

小倉「一緒に飯食うべし」

武「……はい」

小倉「外で待つでつがら」

と出口に向かう。

武、小倉を見て、仕事に戻る。

海沿いの道を走る車・中

助手席に座っている武、窓外を見つめて
いる。

港に建設中の工場が見える。

小倉「あれは山田さんの工場。来月に出来上
がるって」

武「……」

小倉「皆、復興に向がって、頑張ってるんだ」

武、黙り込んで外を見る。

港に水産工場が何軒もあり、働いている
人たちが見える。

海沿いにある食堂

武、海鮮丼を頬張っている。

向かいの小倉も海鮮丼を食べている。

武「小倉さん、話は何ですか」

小倉、丼をテーブルに置く。

小倉「あんだ、カキ、もうやんねえのが？」

武、窓外の海を眺める。

武「……いつかまた暴れだすんじゃないかと、

この海を見るたびに思ってしまう。怖いんだ」

とまた井を持ち上げ、齧き込む。

小倉「実はね、広島の江田島でカキの養殖をやってる友達がいるんだ。この間、脳卒中で倒れで、命は助がったが、仕事ができなくなつた。息子は公務員で、工場を継ぐ気が全くなえつつんだもの。それで、困ってるんだよ」

武「……」

小倉「昨日、そいづから電話があつたんだ。カキの養殖できる人がいねえがって。そう聞がれで、あんだのことがすぐに浮かんだ。それで、勝手にあんだの話をしだんだ」

武「ええ……でも、俺……」

小倉「いづまでも仮設住宅に住んで、コンビニでバイトをしでたら、あの世で親父が泣くべつちや」

武「……」

小倉「それに、由実ちゃんの気持ちも考えで

みるよ。あんな狭いどごさ、ずっと住んで
だら、キチガイになる。帰ったら、由実ち
やんさ相談しろ。良いチャンスだべっちゃ」
武「……ありがとうございます」
と黙って井を蹴き込む。

仮設住宅・台所

台所に木村由実（30）、ジャガイモの
皮を塗っている。

武の声「ただいま」
と入ってくる。

由実「お帰り」
と塗いたジャガイモを切り始める。

同・居間

武、仏壇に向かう。
仏壇に武の父、母と幼い娘の遺影が飾ら
れている。

武、おりんを鳴らし、手を合わせ、目を
瞑る。

部屋の真ん中にある卓袱台に座り、テレビをつける。

「広島カープが25年ぶりに優勝」と女性キャスターがニュースを読み上げている。

歓声の中、選手たちが監督を胴上げする映像が流れる。

武、テレビを消して、タバコを取り出して火をつける。

武「今日、小倉さんがコンビニにきたんだ」

由実、ゆでた白滝を切りながら、

由実「そう」

武「広島の江田島にあるカキ養殖の工場を継がねえがって」

由実「うん……」

武「……どう思う？」

由実「いいじゃない？」

と鍋に油を注ぎ、切った玉ねぎ、人参、ジャガイモを入れて炒める。

武、料理する由実の後ろ姿を見つめる。

由実「晩ご飯は肉じゃがよ」

武「うん」

同・寝室（夜）

それぞれの布団の中で、武と由実が寝ている。

武「由実って、広島さ行ったことある？」

由実「高校の時、修学旅行で行ったよ。原爆資料館を見学した」

武「……本当にいいのが。ここを離れて、あんな遠いところで暮らすのが」

由実「武だって、もう一回牡蠣の養殖やりたいでしょ？」

武「……江田島ってどういうとこだべ」

由実「知らないけど、ここよりはいい。ここより悪いとこないから」

武「……」

広島 電停

並んでいる人々の中に武と由実がいる。

ポストンバッグを提げている武、駅の向こう側にあるデパートのビルを見ている。

「祝広島カープ セ・リーグ優勝 セール開催中」の垂れ幕がいくつもかかっている。

武「何が、俺たぢを歓迎してるみたい」

由実も垂れ幕を見る。

風にはためいている垂れ幕。

路面電車がやってくる。

栈橋

武と由実、フェリーに乗って行く。

海を渡るフェリー

向かい合って座っている武と由実、海を見ている。

港に向う大きな黒い自衛艦が見える。

由実「……」

武「……」

自衛艦が見えなくなる。

穏やかな海面に牡蠣養殖筏がたくさん浮かんでいる。

筏の上に牡蠣を収穫している人が見える。

武、由実を見る。

由実、海面を見つめている。

メイソングタイトル 「島のバラード」

木村家・寝室（早朝）

暗闇の中、目覚ましが鳴り響く。

畳の上に敷いた二つの布団で武と由実が寝ている。

武、目が覚める。

横に寝ている由実を見る。

由実、寝返りを打つ。

武、手を伸ばし、目覚ましを止める。

起き上がり、静かに襖を開けて、出て行く。

同・リビング

武、鍋からカレーを皿に盛りつけて、食卓に座り、食べ始める。

寝ぼけた由実、入って来る。

武「おはよう」

由実「おはよう」

由実、朝食を食べている武を見る。

由実「起こしてくれればいいのに」

武「寝てでいいよ。まだ5時前だから」

由実、冷蔵庫から牛乳パックを取り出して、コップに注ぐ。

コップを武に渡す。

武、牛乳を受け取り、飲む。

カレーを齧き込む。

武「ごちそうさま」

と立ち上がり、食器を片付けようとする。

由実「やるよ」

武「じゃ、お願い」

由実、食器を流し台に運ぶ。

武、作業服に着替える。

武「行っできます」

由実「行つてらっしゃい」

武、玄関に向かう。

同・表

外はまだ暗い。

ボデイに鈴木水産と書いてある軽トラックが停まっている。

家から出て来る武、軽トラックに乗り、エンジンをかける。

ヘッドライトを付けた車が道路へ走っていく。

海沿いの道路

武の車が走っている。

鈴木水産・表

武の車が海辺に立つ鈴木水産にやって来る。

武、空き地に車を止め、降りる。

タバコを取り出して口にくわえて、火をつける。

タバコを吹かしながら、暗い海を眺める。

岡田の声「木村さん、早いのお」

武、振り向くと、隣の岡田水産の岡田一郎（70）がいる。

後ろに中国人の技能実習生趙鵬（チョウウペン）26）がついている。

武「（会釈して）岡田さん、おはようございま
す」

岡田「朝晩だいぶ寒くなってきたのお」

武「本当にそうです」

岡田「これから書き入れ時じゃ。体に気を
つけんどの」

武「岡田さんも体を大事にしてください」

岡田「じゃ、行って来るけえ」

武「行ってらっしゃい」

武、タバコを深く吸い込んで捨てる。
棧橋へ向かって降りていく。

漁船の操舵室に入る。

エンジン音がして、漁船が港を出て行く。

海を行く漁船

船の灯りで海面にたくさんのお蠣養殖
筏が浮かんでいるのが見える。

× × ×

港とかなり離れたところで武、漁船をと
め、船のロープを牡蠣養殖筏にくくりつ
ける。

竹が格子状に組まれた牡蠣養殖筏に武、
竹と竹の間に落ちないようにゆっくりと
降りていく。

しゃがんで、筏に縛られているワイヤロ
ープを解き始める。

解いたワイヤロープをいくつかまとめて、
船に設置してあるクレーンのフックに引
っ掛ける。

船に戻ってクレーンを操作して、長いワ
イヤにぎっしりとくっついてお蠣が

海面から徐々に姿を現す。
引き上げられていくワイヤにくっついて
いる牡蠣。

武、大きなはさみで一本のワイヤの下端
にある留め具を切ると、牡蠣がどさっと
籠に落ちていく。

また一本のワイヤを切る。

× × ×

空が白んでくる。

漁船が港に向かっていく。

籠に溢れるほど牡蠣がいっぱい。

武、船を港にとめる。

工場のクレーンで牡蠣の入った籠を陸上
につりあげていく。

鈴木水産・表

まだ泥がついている水揚げされたばかりの牡蠣を洗浄機に入れる。

綺麗になった牡蠣が籠に落ちてくる。

武、工場の前にある滅菌用水槽へ籠を運

んで、入れる。
滅菌された牡蠣を取り出し、ベルトコンベヤーに出すと、牡蠣が中の打ち台へ運ばれていく。

同・作業場

帽子とエプロンをかけている老女たちが並んで打ち台に座っている。
それぞれの前に殻付きの牡蠣がいっぱいある。
老女たち、手鉤状のカキ打ちを牡蠣殻に入れ、こじ開けて、牡蠣の身を剥き出す。
盥いた身を塩水を盛った盥に入れる。

スーパー

牡蠣の剥き身のパックがたくさん並んでいる。
由実、牡蠣パックの隣に置いてある銀鮭の切り身を買って物籠に入れる。
歩き出すと、通りかかる人にぶつかりそ

うになる。

見ると、東南アジア系の若い男のグループがはしゃいで買い物車を押して去っていく。

木村家・台所

由実、卵焼きを切っている。

グリルを引き出して、鮭の焼き加減をみて、また戻す。

鈴木水産・表

武、牡蠣を洗浄機に入れている。

由実、ハンカチで包んだ弁当箱を抱えてやってくる。

武、手を止め、水道水で手を洗う。

由実、武に弁当箱を渡す。

武「いつもありがとう」

由実「ううん」

武「今日、鈴木さんに今月の金を払いに行ぐがら、10万おろしてどいでける」

由実「うん。じゃ」

と踵を返す。

鈴木水産・休憩室

パートの内田幸子、武が食べている弁当を覗く。

銀鮭の切り身に卵焼き、焼き肉とサラダが入っている。

幸子「武さん、幸せですね」

武、すこし照れて弁当を食べ続ける。

老女たち、弁当を食べながら、世間話に花を咲かせる。

和子「佐藤水産の佐藤さんが再婚したんと」

幸子「佐藤さんっていくつじゃったかいね？」

京子「70は超えとるよ」

恵美子「ええ……」

和子「再婚相手は中国人なんと。いくつじゃと思う？」

幸子「50？」

和子、首を振る。

京子「40？」

和子「33」

一同「ほんまに！」

和子「佐藤さんのとこの中国人の研修生に紹

介してもらおうたんじゃって」

恵美子「は～～よう自分のおじいさんぐらい

の年の人んとこに嫁いできたわ」

幸子「（武に）うちにも中国人の研修生がくる
んですつてね」

武「はい。来週の週末に」

幸子「武さんも少しは楽になるんですね」

武「そうですね」

道

由実、自転車を漕いでいる。

道端の草ぼうぼうの畑に大きな白い鳥
がいるのに気付く。

由実、自転車を降りて、白い鳥に目を凝
らす。

雄のクジャクである。

由実、自転車を止める。

振り返ると、クジャクがいなくなっている。

由実、周りを眺める。

畑に隣接する家の庭に白い影に気付く。

由実、庭に近づいていく。

クジャクが餌を食べている。

由実、微笑んで眺める。

女の声「珍しいじゃろう。白いクジャク」

由実、振り返ると、家の前に老女が立っている。

由実「こんにちは」

と去って行こうとする。

老女「お茶でも飲んでいきんさい」

伊藤家・リビング

由実、伊藤光子（85）と向き合っている座っている。

光子、煎餅をぼりぼりとかじっている。

由実、お茶を飲みながら、部屋を眺める。
年季の入った家具が置かれている。

由実、お茶を飲み干す。

由実「ごちそうさまでした。そろそろ失礼します」

光子「ああ、そう」

由実、立ち上がる。

光子「ああ、ちょっと待ちんさい」

由実「……」

光子、リビングを出て行く。

しばらくして、手に一本の長い白い羽根を持って、戻ってくる。

光子「これ、持っていきんさい」

と由実に手渡す。

由実、羽根を受け取って、見つめる。

光子「さっきの子の羽根なんよ。家に飾ると、

幸せが来るってゆうてね」

由実「……ありがとうございます」

木村家・仏間

由実、クジャクの羽根を差した花瓶を、
仏壇の隣に置く。

江田島高校・映画研究部部室

ドアに「上映中」と張り紙が貼ってある。

同・同・中

暗い部屋の中、テレビがついている。

仮設住宅が写っている映像が流れている。

テレビ画面の光りで、真剣な顔つきでテ

レビを見ている鈴木莉奈（16）、山内

亮平（16）、織田剛（30）が見える。

「END」という画面になる。

莉奈、立ち上がり、電気をつける。

莉奈「織田先生、どうですか？」

織田「うん、だめじゃね」

莉奈「どこがだめですか？」

織田「全般。震災後の様子だけ写っとして、

人間が一人も出てこなかった。それじゃた

だの報道番組じゃ。映画とは呼べん」

莉奈、へこむ。

織田「鈴木さんの行動力は買うよ。ただ、映画をやる以上、人間とちゃんと向き合わなきゃ。人間をちゃんと描かんといけん」

莉奈「週末に、また熊本に行きます。必ず取材対象を見つけてます」

亮平「俺も一緒に行きます」

織田「（笑って）震災に興味があるのはいいこと

とじゃけど、まずは周りの人から始めたらどうだ。きつと、いろいろな発見があると思うよ。次の作品、楽しみにしてる。頑張ってる」

と出て行く。

しょんぼりになって椅子に座り込む莉奈。

亮平、DVDプレーヤーからDVDを取り

出し、ケースに入れて、莉奈に渡す。

亮平「いい人、きつと見つかるよ」

莉奈、DVDを受け取る。

莉奈「うちの周りはずまらん人ばかりで、

映画になりそうな人なんかおらん。(亮平を見る) 亮太くんって面白い知り合いおらんのん？ 親戚とか」

亮平「うん……おらんね」

莉奈「やっぱり…大体、この島がつまらなげえよ」

と立ち上がり、出ていく。

亮平、ついていく。

木村家・和室(夕方)

由実、干している洗濯物を籠に入れる。

籠を抱いて縁側に上がって、和室に入っていく。

由実、畳の上に座り込み、洗濯物を取り出して畳もうとするが、やめる。

内股に手を当て、優しく撫でる。

股間へ動かして、撫で続ける。

由実、畳に寝そべって、手をズボンの中に入れ、股間を揉む。

顔が上気し、体をもぞもぞと振らせる。

車の音が近づいてくる。

由実、慌ててズボンから手を抜き出し、身を起こす。

ティッシュを取って手を拭き、服を整える。

武の声「ただいま」

由実「お帰り」

と服を畳み始める。

武、襖から顔をのぞかせる。

武「顔が赤いぞ。熱でもあるんでね」

由実「……すごし暑かった」

武「金、おろした？」

由実「うん」

由実、立ち上がり、寝室に入っていく。

封筒を手にして戻ってきて武に渡す。

鈴木健治の家・リビング（夕方）

鈴木悦子（69）、トイレでお茶を運んでくる。

向き合って座っている夫の健治（70）

と武の前にお茶を置いて、去っていく。

健治、顔の右半分が歪んでおり、右手の横に杖が置かれている。

武、封筒を健治に渡す。

武「今月分です」

健治「工場は、大丈夫か？ 一人で大変じゃろう」

とろれつの回らない声で話す。

武「もうすぐ研修生が来ますから」

健治、お茶を一口飲む。

健治「あの牡蠣は二年かけて育ててきたんじや。それがこんな時期に、こんなことになってしまつて。杖ついででも船に乗って、収穫に行こうかと思ひよつた。武さんが来てくれて、ほんま助かつたわ。ありがとう」
武「こぢらこそ、やらせでくれてありがとう」
「ございました」

鈴木伸一の家・リビング（夜）

莉奈、母・直子（40）と父・伸一（4

〇）が食卓を囲んで食事を取っている。

おかずはカキフライと味噌汁。

直子「この間、町で武さんにあったんよ」

伸「ほうか」

直子「彼もなかなかの苦勞人じゃね。津波で
両親と子供をなくしてから、地元を離れて、
見ず知らずの土地で頑張ってる」

伸「お父さんの工場を継いでくれて、ほん
まに助かったよ」

莉奈「ほうか。木村さんがおったんじゃ」

直子「なに？」

莉奈、ご飯を齧き込む。

莉奈「ごちそうさま」

と食器を流し台へ運ぶ。

伸「そういえば、夏休みに撮ったやつ、い
つ見せてくれるんじゃ」

莉奈「今度ね」

とリビングを出て行く。

武、風呂に浸かっている。

手を股間に伸ばして、しごき始める。

風呂場の外に由実、武の着替えを持ってきて椅子に置き、床に散らかしている武の服を洗濯籠に入れる。

由実「私、バイトを始めようと思ってるの」

驚く武、手の動きをやめる。

武「……そう、何がやった方がいいべし」

と長く息を吐く。

自転車を漕いでいる由実

道端にカラオケスナックがある。

自転車を降りて、スナックに向かう由実。

壁に「歌とお酒が好きな女性バイト急募中」という張り紙が貼っている。

由実、張り紙を見て、ドアを開ける。

由実「すみません」

カラオケスナック「佳子」・中

比嘉佳子（32）、机を拭いている手を

止める。

佳子「こんにちは」

由実「こんにちは、あの、バイトまだ募集してるんですか？」

佳子「中へどうぞ」

由実「お邪魔します」

と中に入る。

佳子「（手前の席を指差して）座って」と調理場に入る。

由実、店内を見回す。

テーブルが三つあり、カウンターには4人ほど座れる。

佳子、お茶を持ってくる。

由実「ありがとうございます」

佳子、由実と向き合って座る。

佳子「しょぼい店でしょ」

由実「いいえ。綺麗です」

佳子「多いときは、10人ほどお客さんがくるの」

由実「そうですか」

佳子「お名前は？」

由実「由実です。木村由実」

佳子「私、佳子、比嘉佳子」

由実「沖繩出身なんですか？」

佳子「ええ」

由実「なまり、全然ないんですね」

佳子「由実さんもこの人じゃないでしょ」

由実「東北から来たんです」

佳子「……大変だったね」

由実「……沖繩もいろいろ大変ですよ。この間、辺野古訴訟、翁長知事が国に負けた
ニュースを見たんです」

佳子「ばかばかしい話だよ。この国は一体誰のためにあるのか……まあ、暗い話やめ
ましょ。午後の5時から夜の11時まで。」

週五日。いい？」

由実「はい」

佳子「お願いします」

由実、お茶を飲む。

佳子、由実の指輪に気付く。

佳子「夜、旦那をひとりにしといていいの？」
由実「……別に何もありませんから」

鈴木水産・表

由実、武に弁当を渡す。

由実「バイト、見つかったよ」

武「どんな」

由実「『佳子』という名前のカラオケスナック。
ク。

5時から11時まで」

武「……いがつたじゃん。由実は昔からカラオケ好きだから」

由実「これながら、一緒に晩ご飯を食べられなくなるけど」

武「気にしねえでいい」

海沿いの道

制服姿の莉奈と亮平、自転車を漕いでやってくる。

鈴木水産・表

莉奈、亮平と武、立ち話をしている。

武「俺のドキュメンタリー？ なして俺なの？」

莉奈「私たち、震災のことを知りたくて、だから、経験者から話を聞きたいんです」

武「なるほど。でも、俺っで、つまらないよ」

莉奈「ぜひお願いします」

と頭を下げる。

亮平も頭を下げる。

亮平「お願いします」

武「困っただな……まあ、仕事の邪魔にならねえ程度ならいいけど」

莉奈「ありがとうございます」

武「じいちゃんによろしくと伝えて」

莉奈「はい」

公園

莉奈と亮平、ブランコに座っている。

莉奈「まずは木村さんの仕事の様子を撮る。」

それで、どうしてこの島に来たんかを聞く。
家族構成も聞きたい。できたら、奥さんと
も話をしたい」

亮平、メモを取っている。

莉奈「楽しみじゃな」

亮平「……あの、日曜『怒り』見に行かん？」

莉奈「まさか、妻夫木聡と綾野剛のベッドシ
ーンが目当てじゃないじゃろうね」

亮平「違う。莉奈ちゃんの好きそうな話じ
ゃけえ」

カラオケスナック「佳子」・中（夜）

5人ほど客がいる。

客の一人は長渕剛の『乾杯』を熱唱して
いる。

由実、生ビールを運んで客に出す。

由実「お待たせしました。生ビールです」

客「（由実を見て）新人さん？」

由実「はい。今日は初日です」

客「後でデュエットしようや」

由実「はい」

空のグラスを持って調理場に戻る。

ドアのベルが鳴る。

武、入ってくる。

佳子「いらっしやいませ」

由実、振り返ると、武に気付く。

由実「……いらっしやいませ」

武、カウンターに座る。

佳子、武におしぼりを渡す。

佳子「飲み物をどうしますか？」

武、由実をちらつと見る。

武「おすすめある？」

佳子「うちの泡盛をぜひ飲んでみてください」

武「じゃ、水割りをもらおう」

佳子「（由実に）泡盛の水割り一つ」

由実「はい」

由実、水割りを作つて、武に渡す。

由実「お待たせしました」

と武と目が合ってしまう。

佳子、二人を見る。

客の声「デュエット」

由実「はい」

と客に向かう。

武、泡盛を飲みながら、由実を見る。

『居酒屋』が流れる。

客「『もしも きれいでなかったら』……」

客、歌いながら、手を由実の肩に当てる。

由実、一瞬振り返って武を見るが、また

歌に戻る。

由実「『そうね ダブルのバーボンを遠慮し

な

いでいただくわ』」

武、由実を見ながら、お酒をあおる。

× × ×

歌が終わる。

由実、調理場に戻り、カウンターを見る

が、武がいなくなっている。

佳子「さっきのお客さん、ご主人でしょ」

由実「……はい」

佳子「由実さんを監視しに来たんだね」

由実「……」

海へ行く漁船

莉奈、カメラを手に持ち、運転している
武を撮っている。

隣に立っている亮平、みるみる顔が真っ
青になる。

武「もうすぐ着くよ」

亮平、慌ててドアを開けて、操舵室を出
る。

莉奈「どしたん？」

と慌ててカメラを亮平に向ける。

亮平、しゃがんで船端を掴んで海に吐き
出す。

顔をあげて、莉奈に、

亮平「大丈夫」

また吐き出す。

武「一旦戻ろっか」

亮平「……気にしないでください。（莉奈に）
取

材を続けてください」

莉奈「ほんまに大丈夫なん？」

亮平「うん……」

牡蠣養殖筏の上

莉奈、ゆつくりと降りてくる。

武「足元、揺れないね」

莉奈「昔、よくじいちゃんと来てました」

武「なるほど」

武、しゃがんで、筏に縛られているワイヤを解きはじめる。

莉奈、作業中の武を撮る。

くたびれた亮平、船に座って莉奈を見ている。

漁船の中

莉奈、舵を取っている武を撮っている。

隅に座っている亮平、寝ている。

莉奈「木村さんはなんで、この島に来たんですか」

武「やり直そうど思っ」

莉奈「やり直す？ 何をですか？」

武「……牡蠣。ふるさとの工場が津波に流されでしまったがら」

莉奈「工場のほかにも被害を受けましたか」

武「……両親と娘も……」

莉奈「すべてを失って、どういう気持でしたか？」

武「……」

莉奈「どう思ってましたか」

武「……」

莉奈「失礼な言い方ですけど、死にたいと思
いましたか？」

武、莉奈を睨みつける。

莉奈、武を見据える。

武「死にだいつて、毎日毎日考えでだ。でも、
妻がそばにいでくれたがら」

莉奈「奥さんも一緒にこの島に来たんですね。

仲のいい夫婦ですね」

武「まあ」

莉奈「震災後に離婚の道を選ぶ夫婦が増えた
というニュースを見たんですが、そういう
ような話、一回も出て来なかったんですか」
武「ながったね」

莉奈「あの、子供はもう作らないんですか」
武「さつきがら、なにつしや？」

莉奈「木村さんのドキュメンタリーを撮って
いるので、深く掘り下げないと……お願い
します」

武「子供を作る話、一回も出てこなかった」

莉奈「カメラをしまおう」。

莉奈「今日はありがとうございました。今度、
奥さんに話を伺ってもいいですか」

武「あいつ、受けるかどうかわかんねえけど、

一応伝えどぐよ」

莉奈「お願いします」

木村家・リビング（夕方）

由実、鏡を見ながら服を整える。

武、帰ってくる。

武「もう行くのが」

由実、鏡を見ながら、

由実「うん」

足元に置いているバッグを取る。

由実「あの、店さもう来ないでよ」

武「……いづまでやるの？ このバイト」

由実「飽ぎだら、やめるけど」

と出ていこうとする。

すれ違うとき、武、由実のバッグの紐を掴む。

由実、武を見る。

武、紐を手放す。

由実、出て行く。

同・仏間

仏壇の前に武、目を瞑って手を合わせている。

しばらくして目を開け、手を伸ばしてクジャクの羽根を撫でる。

カラオケスナック「佳子」・中（翌日）

カメラに写されている由実。

莉奈、カメラを持っている。

莉奈「木村さんのことをどう思っていますか」

由実「いい人。優しい人」

莉奈「木村さんがこの島に来ると決めた時に、

反対しなかったんですか」

由実「どうして反対するの？」

莉奈「ふるさとを離れるじゃないですか」

由実「あそこにはもう何も無いから」

亮平、カウンターに座って莉奈を見守っ

ている。

佳子、カウンターに身を乗り出す。

佳子「彼女、可愛いよね」

亮平「……うん……」

由実、お茶を一口飲む。

由実「ねえ、莉奈ちゃんってどうして撮って

るの？」

莉奈「映画が好きだから」

由実「つまらないからじゃないの？」

莉奈「ええ？」

由実「だって、この島でやることないんじゃない？ 恋愛をすれば、楽しくなるよ。だから映画なんか捨てて、恋人を作ってみなよ」

鈴木家・莉奈の部屋（夜）

莉奈と亮平、パソコンで由実のインタビュー

ユーを見ている。

莉奈、映像を止める。

莉奈「何か、むかつくね」

亮平「まあ、初めての相手にこういう質問されたら、そういう態度になるじゃろ」

莉奈「どっちの味方なん？」

亮平「もちろん、莉奈ちゃんの」

莉奈「……ねえ、ありがとね」

亮平「急にどうしたの？」

莉奈「亮平くんが参加してくれなかったら、映画研究部なんか立ち上げられなかった」

亮平「こちらこそ、参加させてくれて、あり

がと」

莉奈「楽しい？」

亮平「うん」

莉奈「良かった。ただの暇つぶしじゃったら、
どうしようかと思つて」

カラオケスナック「佳子」・中（夜）

客、一人もいない。

由実と佳子、調理場に立っている。

由実「暇だね」

佳子「男たち、たまには家族ごっこをしなく
ちゃ」

笑う由実。

佳子「由実ちゃんって子供はいないの？」

由実「……女の子がいたんです。津波で……」

佳子「……もう作らないの？」

由実「……死んだ子に申し訳ないと思つて」

佳子「……ねえ、歌おうよ」

と由実の手を引っ張つて調理場を出てい
く。

佳子、デンモクを手取る。

佳子「誰の歌がいい？」

由実「うん……モー娘」

佳子「いいね」

とデンモクを弄る。

テレビ画面に『LOVEマシーン』と曲名が出る。

佳子「踊ろうね」

由実「うん」

テレビ画面にモーニング娘。が踊っている。

佳子、見よう見まねでぎこちなく踊りだす。

由実、佳子を見てぎこちなく踊る。

佳子「『あんたにや、もつたいない』」

由実「『フーフー』」

佳子「『あたしゃ本当 Z CE BODY……』」

踊りながら、歌い続ける二人。

佳子「『日本の未来は 世界がうらやむ』」
と突然歌うのをやめる。

由実「……」

佳子「嘘だったよね。この歌詞。信じてたのに」

由実「……」

鈴木水産・表

亮平、ホースで床に水を流している武を撮っている。

莉奈、隣でカメラ画面を見ている。

武、ホースを床に置き、莉奈に向かってくる。

武「あの、女房のインタビュー、見せてくれない？」

莉奈「……完成したら、DVDを差し上げますよ」

武「今じゃ、だめなの」

莉奈「はい……」

武「ほんとにだめ？」

莉奈「すみません……どうかしましたか？」

武「ねえ、女房、俺の悪口を言った？」

莉奈「ええ？ 別に言っていないですよ」

武「そうか」

と仕事に戻る。

カラオケスナック 「佳子」・中（夜）

武、酒を飲みながら、客と歌を歌っている由実を見ている。

佳子、武にポテトサラダを手渡す。

佳子「由実ちゃんと歌ったら？」

武「……音痴なんで」

佳子「喧嘩でもしたの？」

武「別に」

佳子「ならいいけど。夫婦で仲良くしてね」

武「……」

と酒を飲む。

鈴木水産・表

一台の車がやってきて、止まる。

車から男二人が降りる。

日中友好協会の佐々木（50）と中国人

の技能実習生王大力（オウダリ29）。

武、二人を見て

武「初めまして。木村です。よろしくお願
いします」

佐々木「佐々木です。よろしくお願
いします」

佐々木、王に目をやる。

王「初めまして。中国から来た王です。よろ
しくお願いします」

とたどたどしく挨拶をする。

武「中へどうぞ」

と二人を中へ案内する。

同・休憩室

机に囲んで座っている三人。

佐々木「木村さんはご存知かと思
いますが、

王はこれからの三年間、御社
でお世話になることになって
います」

武「はい」

佐々木「彼は日本の先進技術
を学ぶ為、日本に来たので、
いろいろ教えてください」

と頭をさげる。

王もまねして頭をさげる。

武「もちろんです」

佐々木「もし何かあったら、いつでも連絡してください」

武「はい」

佐々木「では失礼します」

同・表

佐々木、トランクからスーツケースを出して、王に渡す。

佐々木「（王に）（中国語で）社長さんの話、ちゃんと聞きなさい。変なまねをしたら、すぐ中国に帰らせるから。分かってるな」

王「（中国語で）分かりました」

佐々木「木村さん、よろしくお願いします」

武、会釈する。

佐々木、エンジンをかける。

車が去っていく。

見送る武と王。

武「さて、皆に紹介しましょうか」

王、戸惑っている。

武「日本語、分かりますか」

王「すこし……あの、えっと、ゆっくり話してもいいですか」

武「皆に紹介します」

ともう一度話す。

王「お願いします」

と武について作業場に入っていく。

同・作業場

老女たち、作業を止めて王を見ている。

王「みなさん、初めまして。中国からきた王です。よろしくお願いします」

幸子「日本語、上手ですね」

王「いいえ、下手です。挨拶しかできません」

老女たち、笑う。

幸子「おいくつですか」

王「29です」

京子「彼女はいますか？」

王「妻がいます」

和子「京子さん、残念だね」

と一同が笑いだす。

アパート・廊下

101号室の前に武、足をとめる。

武、鍵を開けて部屋に入る。

王、武について入る。

同・部屋

台所を通って部屋に入る。

部屋には家具がほとんどない。

武「何かあったら、言つて」

王「はい」

武、王に鍵を渡す。

カラオケスナック「佳子」・表（夜）

ドアのノブに「貸し切り」の看板がかかっている。

同・中

武、卵焼きをつまみながら、はしゃいでいる皆を見る。

幸子「さて、次、誰が歌うの？」

老女たち、枝豆を食べている王を見る。

一同「王さん、王さん、王さん」

王「すみません……日本の歌を知りません」

幸子「中国の歌でもいいですよ。佳子さん、

中国語の歌、ありますよね」

佳子「おそらく」

幸子、王にデンモクを渡す。

王、デンモクをもらう。

王「……」

王、デンモクをいじりながら、

王「ここは広島ですから、中国の大人気の広島
島の歌を歌います」

テレビ画面に「広島之恋」と曲名が表示
されている。

王、マイクを握り、立ち上がる。

王「（中国語で）『あなたはもっと早く僕を

拒

むべきだった、僕の求めるがまま受け入れるべきではなかった』……」

武と老女たち、手拍子を取っている。

由実、食器洗いを忘れ、王に見とれる。

棧橋（早朝）

武、王をつれて降りていく。

漁船に乗る。

漁船

操舵室に入る二人。

武、エンジンをかける。

船が港を離れていく。

王、海を眺める。

王「広いです」

武「ん？」

王「初めてです。海に行きます」

武「ん？ どういうこと？」

王「船に乗ります。海に行きます」

武「どういふごどが、さっぱりわがんね」

王「海に行きます。初めてです」

武「わがっだから」

牡蠣養殖筏の上

武、船から筏に降りる。

王、筏を見て足を踏み出せない。

武「早くして」

おそろおそろと筏に降りる王、筏に足がつくと、体が揺れて竹と竹の間から海に落ちてしまう。

手をバタバタさせて筏を掴む。

武、王の手を引っ張って筏に立たせる。
ずぶ濡れの王を見て、ため息がつく。

武「仕方ないな」
と船に戻る。

寒さで体が震えている王、筏に突っ立っている。

武「戻るべ」

王「すみません……」

武「誰でも最初は落ちるんだ」

王「はい……」

王、船に戻って武について操舵室に入る。

武、エンジンをかける。

武「俺の言ってるごど分がつか？」

王「……すこし」

王、ズボンのポケットから携帯を取り出して、慌てていじるが、反応がない。

武「壊れだが」

王「家族の写真、中にあります」

鈴木水産・作業場

王、カキ打ちを殻に入れるが、こじようとするが、滑る。

幸子「焦らんでいいよ」

とゆっくりとカキ打ちを牡蠣の殻に入れて、牡蠣をこじ開ける。

幸子「こういう風にして」

王、もう一回やってみるが、牡蠣を開けられない。

幸子「いっぱい練習すれば、うまくなるからね」

王「ありがとうございます」

同・表（夕方）

王、ホースで地面の汚れを流している。

隣の岡田水産の趙鵬がやってくる。

趙「（中国語で）昨日、来たって？」

王「（中国語で）はい」

趙「（中国語で）俺は趙鵬。山東人。あなたは？」

王「（中国語で）王大力です。俺も山東人です」

趙「（中国語で）同郷だ。よろしく」

握手する二人。

王「（中国語で）趙さん、ここに来てどのくらい

いですか？」

趙「（中国語で）ちょうど一年」

王「（中国語で）じゃ、大先輩ですね。いろ

い

ろ教えてください」

趙「（中国語で）いいよ」

王「（中国語で）今朝筏から海に落ちてしま
つ

たんです」

趙「（中国語で）はは、初日、皆落ちるんだ
よ。

俺も落ちた」

王「（中国語で）そうですか……それで、携
帯

が壊れてしまったんです。修理屋って分か
りますか」

趙「（中国語で）広島に行かないとね。週末
に

つれて行ってあげるよ」

王「（中国語で）本当ですか？」

趙「（中国語で）任せて」

王「（中国語で）お願いします」

王、突然大きくしゃみをする。

続けざまに何回もする。

趙「（中国語で）風邪ひいた？ 体気をつけて

よ

王「（中国語で）うん」

鈴木水産・作業場（翌日）

由実、武に弁当箱を渡し、作業台を見渡す。

由実「王さんは？」

武「昨日、海さ落でて風邪引いってしまったんだ」

由実「そうなの？ 大丈夫かな」

武「様子見さ行っでけね？」

王の部屋・前

由実、ドアをノックする。

由実「すみません」

しばらくして、顔が上気した王、ドアから顔を覗かせる。

王「木村さん……」

同・中

王、ベッドに寝転んでいる。

由実「病院に行った方がいいんですよ」

王「…病院、高いです」

由実「保険証があれば、そんなに高くないんですよ。あの、保険証はありますか？」

王「ほけんしよう、何ですか……」

由実、机に置かれてある財布に気付く。

由実「失礼します」

と財布を開いて、見る。

由実「やつぱないんですね。薬を買ってききます」

と出て行こうとするが、振り返る。

由実「ご飯を食べました？」

王、首を横に振る。

由実「食べたいもの、ありますか？」

王「…かんづめ…あの、なしの缶詰を食べたい……」

由実「なしの缶詰？ 見た事ないですけど。

ほかの缶詰じゃだめですか」

王「……」

x x x

由実、ベッドに身を起こして、桃の缶詰を食べている王を見守っている。

王、汁を飲み干して空のびんを床に置く。

由実「缶詰、好きですね」

王「子供の時に、風邪を引く時に、お母さんによくなしの缶詰を買ってくれました」

由実「そうなんですか。日本になくて残念です
ね」

王「子供の時、家はお金がありません。缶詰は一番のごちそうでした」

由実、王のおでこに手を当てる。

由実「熱、さがったみたいですね」

王「私、もう大丈夫です。ありがとうございます
ました」

パソコン画面に武のインタビュー映像
が流れている。

織田、映像を止める。

莉奈と亮平、織田を見つめる。

織田「取材対象をもっと追い詰めんと、面白
いものにはならんよ。それと、自分たちも
追い詰めんとね」

莉奈「はい、頑張ります」

木村家・リビング（夜）

亮平、カメラを持って武を撮っている。

莉奈、亮平を撮っている画を見ている。

武、豚の生姜焼きをつまみながら、ビー
ルを飲んでいる。

莉奈「これは奥さんがつくったんですか」

武「んだ。おかずを作っておいて、バイトさ
出がけるようにしている」

莉奈「奥さんが夜のバイトをすることに、反
対しなかつたんですか」

武「ん？」

莉奈「二人は完全にすれ違う生活になってい
ますが」

武「多少寂しいけど、まあ、彼女がやりだが
ったごどだから」

とビールを飲み干して、コップにビール
を注ぎ込む。

莉奈、上目使いに亮平を見る。

亮平「……あの、木村さん、夫婦、セックス
はどうなってますか……」

武、手にしていたコップを食卓にバンと
置く。

武「あんたらさ、人の生活さずけずけ入って、
どういうつもりなの」

亮平「……」

莉奈「……すみません。震災を経験した夫婦
の間に何か変化があったのかを知りたくて
……つい、立ち入った事を聞いてしまいま
した」

武「人のセックスを聞く前に、あんたらはど
うよ？ やってるの？」

莉奈「……私たちはそういう関係じゃないんです。ただの部活の仲間です。そうよね、

亮平くん」

亮平「うん……」

武「じゃ、ほがの人とは？」

莉奈「……」

亮平「……」

武「（鼻で笑って）童貞にセックスやなんや言

われたくないね」

莉奈「……いい作品を作りたいんです。ご協

力お願いします」

亮平「お願いします」

武「そんなに作品が大事だったら、セックスしでがら出直せよ」

道（夜）

莉奈と亮平、並んで歩いている。

莉奈「あの、亮平くんって、彼女おらんよね」

亮平「それがどしたん？」

莉奈「なんもない」

二人、黙って歩いていく。

カラオケスナック 「佳子」・中（夜）

武、酒を飲みながら、客とカラオケの機械に向かおうとする由実を見る。

立ち上がり、客の前に立ちふさがる。

武「（客に）次は俺の番だ」

客、武を睨みつける。

由実「ああ、すみませんね」

と客をなだめる。

客、席に戻る。

由実、デンモクを取る。

由実「もう来ないっで言っただよね」

武「……」

由実「じゃ、なして？ 私を監視するため？」

客の声「なあ、歌わんのんなら、わしが歌う

けど」

由実「（振り向いて客に）すみません。（武に）

何にする？」

武「任せる」

由実、曲をいれ、武にマイクを渡す。

武「由実とデュエットするの、久しぶり」

由実「……」

ゆずの『栄光への架け橋』が流れる。

武「……」

と呆れる顔をする。

由実「（大きな声で）お客さん、始めるよ」

武「……」『誰にも見せない泪があった 人知

れず流した泪があった』……」

由実「『決して平らな道ではなかった』……」

武、歌う由実を見る。

調理場で食器を洗っている佳子、歌う二

人の後ろ姿を見て、口元に微笑みが浮か

ぶ。

木村家・寝室（夜）

由実の寝顔を、武、眺めている。

手を伸ばして、由実の顔を触れようとする

るが、手を引っ込める。

フェリー

趙、王を二階のデッキ席に連れていく。
フェリーが動き出す。

王「（中国語で）気持ちいい。漁船より百倍
いいですね」

趙「（中国語で）あたり前」
と笑い合う二人。

路面電車の中

町の風景を眺める王。
市街地に入って、高いビルが増えてくる。

雑居ビル

階段を登っていく。
スマホ修理と書いてあるガラスドアを
開けて入って行く。

x x x

出て来る二人。

王、趙に携帯を見せる。

待ち受け画面に笑顔の娘が写っている。

王「（中国語で）可愛いでしょ」

趙「（中国語で）娘？」

王「（中国語で）うん。町、案内してくれませ

んか」

趙「（中国語で）任せて」

町

王、携帯で写真を撮りまくっている。

デパートの前、買い物袋をたくさん提げている人だけがある。

趙「（中国語で）お金持ちの中国人だよ。爆買

いって言われている」

王「バクガイ？」

趙「（中国語で）たくさん買い物するってこと

さ」

王、中国人たちの買い物袋を見る。

王「（中国語で）こんなにつぱい買って、
ど

うやって持ち帰りますかな？」

趙「（中国語で）さ……お金あったら、何を
し

たい？」

王「（中国語で）妻にはダイヤのネックレス
を、

娘はミッキー・マウスが好きなので、上海
デイズニールランドに連れて行ってあげたい
んです」

趙「（中国語で）俺は綺麗な嫁さんをお願い
た

いな」

と笑い合う二人。

ある中国人が地図を持ってやってくる。
男「すみません。（地図を指しながら）えっ
と」

趙「（中国語で）俺も中国人なんだ」

と男に微笑みを見せる。

男「（中国語で）良かった。原爆ドーム、どう

やっていくの？」

趙「（中国語で）この通りをまっすぐ行って、突き当たりで右へ曲がれば」

男「（中国語で）ありがとう」

と集団に戻る。

趙、吹き出す。

王「（中国語で）なにがおかしいですか」

趙「（中国語で）さっきのやつに逆の方向を
教

えたんだ」

平和公園

趙「（中国語で）あれが広島シンボル」

と原爆ドームを指差す。

原爆ドームを眺める王。

王「（中国語で）へへ、ここで原子爆弾が爆

発

したのか」

と何枚も写真を撮る。

趙「（中国語で）アメリカが原子爆弾を落とさ

なかったら、中国は今、日本のものかも」

王、趙に携帯を渡す。

王「（中国語で）俺と原爆ドームを撮ってくだ

さい」

趙、王と原爆ドームの写真を撮る。

王の部屋（夜）

王、チャットアプリで原爆ドームで撮った写真を妻に送っている。

「（中国語で）痩せたね。日本のご飯、口に合わないの」と妻から音声メッセージが来る。

王、「（中国語で）君の手作りの飯を食べたい」と妻に送る。

「（中国語で）後3年我慢して。私たちの新しい生活の為」と妻から返事がくる。

か
「（中国語で）うん……愛ちゃんは寝た
いと。」

く
「（中国語で）熟睡してるよ」と返事が
くる。

しばらくしてから、妻から写真を送って
くる。

ベッドで熟睡している娘が写っている。

手で写真を撫でて口元がほころぶ王。

鈴木水産・表

役所の女職員・斉藤が武にチラシを渡す。

斉藤「3年前の研修生殺人事件が再び起こる
ことを防ぐため、市はいろいろな対策を取
りました。この運動会は市民と外国人研修
生との交流を深めるため、去年から始まっ
たイベントです。ぜひ参加してください」

武、チラシを見る。

チラシには「江田島外国人技能実習生運動会」という文字が印刷されてある。

道（夕方）

由実、バッグを提げて、歩いている。

向かいにスーパーのレジ袋を提げた王が歩いてくる。

王「こんにちは」

由実「こんにちは。風邪、治りましたね」

王「はい。ありがとうございます」

由実「いいえ」

王「あの、由実さん、餃子を好きですか？」

由実「ええ」

王「日曜日、餃子を作りますから、家に来てください」

由実「……うん」

カラオケスナック「佳子」・中（夕方）

酒屋の男、焼酎のケースを運んで床に置

く。

由実「領収書を渡す。」

由実「（奥に向かって）二万六千円です」

佳子の声「財布は調理場にあるから、払って」

由実「はい」

由実、調理場に行き、財布を取って、男に向かう。

由実、財布を開けて、お札を取り出すと、一枚の黒人の赤ちゃんの写真に気づく。

男にお札を渡して、領収書にサインする。

男「毎度」

と出ていく。

由実、写真を取り出して、眺める。

佳子、トイレから出てくる。

由実、慌てて写真を財布に戻す。

佳子「昨日の生ガキ、当たったみたい」

焼酎のケースを見て

佳子「一緒に運んでくれる？」

由実「…うん」

と佳子と焼酎のケースを調理場へ運ぶ。

佳子、焼酎を棚に並べる。

由実「写真、見ちゃったけど、誰の赤ちゃんですか」

佳子、焼酎を並べるのをやめる。

佳子「……私の子……生まれて間もなく、あの世に行っちゃったけど」

由実「……」

牡蠣養殖筏の上

王、筏に縛られているワイヤロープを解いている。

なかなか解けない。

武「よく見でね」

とゆっくりとワイヤロープを解く。

王、また試してみる。

武「海に落どさないように、ちゃんと引っ張ってね」

王「はい」

と返事しながら、作業をする。

手が滑って牡蠣が海に沈んでしまう。

武「バカ！！ 気をづけろって何回も言った
べ」

王「すみません……」

武、うつむく王を見る。

武「俺の言っでるごと、分がっでる？」

王「すこし……」

武「分がらながったら、ちゃんと分がらない
ど言っで。分がった？」

王「……はい……」

王の部屋（夜）

鍋の中のスープがふつつつと煮えたぎ
っている。

王、豚肉と白菜をスープに入れる。

趙、王に携帯を見せる。

趙「（中国語で）可愛いでしょ」

趙の携帯に制服姿の女の子の写真がたく
さん入っている。

王「（中国語で）趙さんが撮ったんですか？」

趙「（中国語で）あそこ、高校があるでしょ。」

時々、あの辺で女子高校生を撮る」

中に莉奈の写真もある。

趙「（中国語で）この子、一番好きなんだ。
制

服の下の足がめっちゃ綺麗。一回、彼女が階段を登ったとき、パンツをちらっと見えたんだよ。びんびんになって、近くの公園のトイレに駆け込んでしごいた。一回でもいいから、彼女と寝たいな」

王「（中国語で）趙さん、変なことしない方が
が

いいですよ」

趙「（中国語で）しないよ」

王、ため息をつく。

趙「（中国語で）どうかした？」

王「（中国語で）趙さんとこの社長さんはどう
う

ですか？」

趙「（中国語で）まあまあ。あのじじい、す
け

べなの。最近、知り合いに良い女がいなかった。よく聞いて来るの。70歳にもなつて」

王「（中国語で）……俺んこの社長さん、時々

怖いんです。仕事でミスしたとき、バカつてよく怒鳴られます」

趙「（中国語で）我慢我慢」

王「（中国語で）あと三年か、長いですね」

山内家・亮平の家

床に座っている莉奈、パソコンで漁船を運転している武の映像を見ている。

映像の中で慌ただしい音がして、カメラが武から操舵室の外でしゃがんでいる亮平に向けられる。

吐き出した後に、カメラに向けて一生懸命笑顔を見せる亮平。

亮平「大丈夫」

また吐き出す。

映像を巻き戻してもう一回見る莉奈。

微笑んでしまう。

亮平、皮を剥いた柿を持って入る。

亮平「何笑つとん？」

莉奈、亮平にパソコンを見せる。

莉奈「編集しようと思つてさ」

吐いている亮平の映像を亮平に見せる。

亮平「気持ち悪……」

と映像を止める。

莉奈「亮平くんつて、船酔うんじゃない」

亮平「格好悪いじゃろ」

莉奈「かわいい」

と笑う。

亮平「からかわんでや」

と莉奈に柿を突き出す。

亮平「母さんがうまいつて」

莉奈、パソコンを閉じて、床に置く。

爪楊枝で柿を差し、食べる。

莉奈、亮平を見て、柿をひとつ亮平の口元に運ぶ。

亮平「……」

莉奈「早く」

亮平、勢いよく柿を食いつき、飲み込んでしまい、むせ込んで激しくせきをする。

莉奈、慌てて亮平の背中を叩く。

ようやく咳がとまる。

莉奈「ごめん」

亮平「いいよ」

莉奈「……どうしよう？ 取材」

亮平「もう一回頼んでみや」

莉奈「……やっぱ、誰かとセックスを……」

亮平「バカなこと考えんなよ」

莉奈「……」

江田島小学校・運動場

海に面している運動場で趙、手にバトンを握って走っている。

少し離れたところに王、焦って趙を見ている。

肌の黒い東南アジア系の若い男、趙を追

い越す。

観客席にいる東南アジアの人々から大きな歓声上がる。

「第二回江田島市外国人技能実習生運動会」という幕がかかっている。

観客の中に武、由実、鈴木水産の従業員たち、そして岡田水産の岡田もいる。

岡田「趙、頑張れ」

と大きな声で応援をしている。

王、趙からバトンを貰い、走り出す。

由実「王さん、頑張れ」

武、大きな声を出す由実を見やる。

王、わずかな差で黒い肌の男に負けてしまふ。

x x x

綱引き。

15人の中国人チーム対15人の東南アジアチーム。

王と趙、歯を食いしばって綱を引っ張っている。

由実、拳を握って、見ている。

日本語と外国語の応援声が混じって運動場に響き渡る。

綱に縛られた赤い布が中国チームへ寄っていく。

王と趙、満面な笑顔で見合う。

観客席にいる武と由実も笑顔になる。

王の部屋

卓袱台の上で王、麵棒で上手に皮を伸ばしている。

傍らで由実、見ている。

由実「私もやってみたい」

王、由実に麵棒を渡す。

由実、練り粉をおさえ、麵棒で伸ばしてみる。

うまく行かず、王を見る。

王、由実の麵棒を握っている手を掴む。

こわばる由実。

王、気がつかず、由実の手を掴んだまま、

練り粉を伸ばす。

皮の形になつていく。

x x x

卓袱台に煮た水餃子の皿が置かれて
いる。

二人、餃子を食べている。

由実「仕事はうまくいってますか」

王「日本語がすこししか分かりません。時々、

困っています」

由実「そうなの……私、日本語を教えてあげ
ましょうか」

王「本当ですか？」

由実「うん」

王「お願いします」

木村家・リビング

武、つまらなさそうにテレビチャンネル
を変えている。

テレビを消して立ち上がり、出ていく。

道

木村、タバコを吸いながら、歩いている。

道路の向こうに、店前の掃除をしている

佳子が見える。

カラオケスナック「佳子」・中

武、酒を飲んでいる。

調理場で佳子、ラフターを小皿に盛りつけている。

佳子、小皿を武に手渡す。

佳子「味見してみて」

武、箸でラフターを崩して口に運ぶ。

武「うまい」

佳子「よかった」

武、佳子を見る。

武「沖縄には戻らないの？」

佳子「(笑って)基地反対のデモを見るたび、

戻って先頭に立ちたいと思うよ」

武、酒を飲み干す。

武「泡盛を」

佳子、泡盛の水割りを作って、武の前に置く。

武、佳子の手を掴む。

佳子、武を見る。

x x x

武、佳子を抱いて、テーブルに座らせる。

佳子、スカートの下に手を伸ばし、すこし腰を起こしてパンツを脱ぐ。

武、慌ててズボンとパンツをおろして、佳子を抱き寄せる。

手を佳子の体中に這わせて、佳子の股間へ伸ばす。

佳子、吐息が漏れてくる。

武、佳子の両足を掴み、開ける。

佳子、両足で武を挟ようにする。

武、佳子の中に入る。

吐息が漏れる佳子、両手で武の背中を掴む。

武、腰を激しく振る。

佳子、足指が反り返っていく。

x x x

カウンターに並んで座っている佳子と武、
タバコを吹かしている。

佳子「由実ちゃんとしてないでしょ」

武「……あの日以来、何となく、やらなくな
った。どつちがらも行かず、そのまま、5
年もたってしまった」

佳子「……あの日って？」

武「3月11日」

佳子「……寂しいわね。武さんも、由実ちゃ
んも」

武「……佳子さんは？ 寂しくないの？」

佳子、すっと立ち上がり、カラオケの機
械に向かう。

武、佳子を見つめる。

佳子、デンモクをとって曲を入れる。

テレビ画面にフランス語のタイトルが表示
されて、落ち着いた音楽が流れる。

佳子、マイクを握り、フランス語で歌う。
聞き入る武。

x x x

歌い終わって佳子、席に戻ってくる。

武「佳子さんってフランス語の歌も歌えるね。

すごい」

佳子「（微笑む）」

武「何の歌なの」

佳子「ジヨルジュ・ムスタキの『私の孤独』。

『私は決してひとりぼっちじゃない、私の

孤独と一緒にだから』って」

武「……」

鈴木水産・作業場

老女たちと並んで作業台に座っている

王、手際よく牡蠣の身を並べている。

武、やってくる。

武「王、ちょっと」

王「はい」

と作業を止めて作業台に降りる。

武について、事務室に入っていく。

同・事務室

武「仕事、覚えできたね。これからも頑張っ
ぺし」

王「はい」

武、引き出しを引き、封筒を取り出して、
王に渡す。

王、封筒を受け取る。

武「今月の給料だ。家賃や光熱費などを引い
て、6万7千円」

王「6万7千円？」

武「うん。どうかした」

王「いえ」

王の部屋（夜）

王、隣で携帯を弄っている趙を見る。

王「（中国語で）趙さん、最初の一ヶ月の給
料

はいくらだった？」

趙「（中国語で）6万ちょっと」

王「（中国語で）そうか……」

趙「（中国語で）どうした？」

王「（中国語で）日本で20万元を稼いで帰る

うと思つてたんだけど、一ヶ月6万円じゃ、借金までしてわざわざ日本に来る必要がなかつたね」

趙「（中国語で）どのぐらい借金した？」

王「（中国語で）5万元」

趙「（中国語で）俺も……夢と現実が違いすぎ。最近、時々、国に帰ろうかなと思つてるの」

王「……」

広島銀行・表

王と趙が出て来る。

王、妻に「（中国語）今送金した。三日間ぐらいかかるって。確認できたら教えて」と送る。

歓楽街（夜）

夜の歓楽街を歩く二人。

一軒のソープランドの前に足を止める趙。

王「（中国語）俺やっぱ無理」

趙「（中国語）たまってるんだろ」

王「（中国語）でも、俺、妻いるし……」

趙「（中国語）せっかく日本に来たから、日

本

の女をやるうぜ」

王「（中国語）あの……」

趙「（中国語）金だったら、貸すよ」

趙、王を引っ張って入っていく。

ソープランド・フロント

スーツ姿の男が立っている。

男「申し訳ありません。うちは日本人専門な
んです」

趙「なんで？」

男「決まりなんです。すみません」

歓楽街

趙、ぶつぶつと言っている。

趙「（中国語）日本人専門って、腹立つな」

王「（中国語）いいよ。高いし」

趙、右手を見る。

趙「（中国語）今晚もお前に頼るしかないな」

王、趙を見て笑う。

木村の家・リビング

テレビが流れている。

武、テレビに目を向けず、庭で服を干している由実の背を見ている。

由実「ねえ」

振り向かずに声をかける。

武「ん？」

リビングに座ったまま、答える。

由実「今日、王さんが日本語を勉強しにくるけど」

武「そうなの」

由実「武さんはどうする？」

武「釣りさ行こうかな」

由実「ごめんね」

武「いいよ」

牡蠣養殖筏の上

武、椅子に座って釣りをしている。

浮子が沈む。

武、急いで釣り糸を巻き付ける。

木村の家・リビング

机に日本語の教材が置かれている。

由実と王、向き合って座っている。

由実「広島は綺麗な町です」

と読み上げている。

王、ノートに書き留めている。

由実「出来ましたか？」

王「もう一回、ゆっくり読んでください」

由実「（ゆっくりりと）ひろしまはきれいなま
ち

です」

王、復唱しながら、筆を走らせる。

王「できました」

由実、立ち上がり、王のそばに行く。

腰を屈めて見る。

由実「島の漢字、間違ってますよ」

と王を見ると、王が襟元からちらっと見える自分の胸元を見つめているのに気付く。

王「……」

と目を逸らす。

由実、王の手を取って自分の胸に当てさせる。

王、すぐ手を引っ込める。

由実、王を見つめる。

王、おそろおそると由実を見る。

手を伸ばして、由実の胸を掴んでみる。

由実、王の手を取って、隣の和室に入る。

同・和室

由実、服を脱ぎ始める。

王も服を脱ぐ。

裸になっていくふたり。
抱き合い、畳に倒れ込む。

王、由実に申し掛かり、手を由実の体中に這わせる。

吐息が漏れる由実、目を閉じる。

王、由実の中に入っていく。

由実、王の動きに合わせる。

息が荒くなっていく二人。

由実「……私、上になりたい……」

王、由実から離れようとする。

由実「……中にいて……」

と両手で王の背中をきつく抱きしめる。

王、由実の背の下に手を回し、つながつ

たまま、由実を引っ張って座らせる。

由実、王を押し倒して、王の上で腰を振り始める。

息が段々荒くなっていく。

由実、目を閉じて、動きが早くなり、登り詰めていく。

王「……」

と精を放つ。

由実、王に覆い被さる。

由実「……ねえ、この間の中国の歌を聞かせて」

王、由実を見る。

王「（中国語で）『あなたはもっと早く僕を拒

むべきだった、僕の求めるがまま受け入れるべきではなかった』……」

目を瞑って聞き入る由実。

同・風呂場（夜）

風呂場から水音が聞こえる。

武、風呂場の外にやってくる。

椅子に置かれてある由実の着替えを手に取り、匂いを嗅いでみる。

服を椅子に戻して、手をドアのノブに伸ばす。

由実の声「武さん？」

武、伸ばした手を引っ込める。

武「……うん」

由実「どうしたの？」

武「……さっきテレビで明日、広島カープの優勝パレードがあるって」

由実「そう」

武「あの、見さいがない？」

由実「うん……」

ドアが開き、由実、裸のままに出てくる。

武、驚き、目を逸らして出ていく。

フェリーの中

満席。

窓側にいる由実、海を眺めている。

隣に座っている武、由実の横顔を見ている。

莉奈の声「木村さん」

武、振り向くと、莉奈と亮平が立っている。

由実、二人を見やる。

武「莉奈ちゃん、亮平くん」

莉奈「パレードですか」

武「うん」

莉奈「もしよければ、二人に密着させて頂け

ませんか？」

武「二人、卒業した？」

莉奈「卒業？」

武「あれよ、あれ」

莉奈と亮平「……」

武「じゃ、お断りします」

莉奈と亮平「お願いします」

武、首を横に振る。

莉奈と亮平、しょんぼりと席に戻って
いく。

平和通り

人でごった返している。

武と由実、人ごみの一番外側にいる。

「きた！」大歓声上がる。

武、爪先立って通りを見ようとするが、
前の人に遮られて見えない。

振り返ると、由実がいない。

周りを見渡すが、由実の気配がない。

武、人ごみを離れて、携帯を取り出して、電話をする。

出ない。

武、電話をしまい、周りを見渡す。

武「由実、由実」

武、走っていく。

公園で女の子といる由実に気付く。

走って由実へ向かう。

公園

由実、泣いている女の子の頭を撫でて
いる。

由実「名前はなんて言うの？」

女の子、泣き続ける。

由実、やってくる武に気付く。

由実「迷子。名前を聞いても、ずっと泣い
でて答えでくれないの」

武、女の子の前にしゃがみ込む。

武「お父ちゃんとお母ちゃんと一緒に来たの？」

女の子、微かに頷く。

武「お父ちゃんとお母ちゃんに会いにいかない？」

由実、女の子をなだめる武を見つめている。

女の子、泣くのをやめ、手の甲で目をこすりながら、武を見る。

女の子「うん」

武、女の子の手を繋ぐ。

女の子、由実に手を伸ばす。

由実、女の子の手を握る。

手を繋ぐ三人、大通りへ歩き出す。

平和通り

女の子、あたりを見ている。

武「お母ちゃんとお父ちゃん、いる？」

女の子「見えん……」

また泣き出しそうになる。

武「わかった」

武、しゃがむ。

武「おじちゃんの肩に乗って。そうすれば、きつと見つかる」

女の子「うん」

武、振り返って由実に、

武「乗せであげで」

由実、女の子を抱いて、武の肩に座らせる。

武、女の子の両足を掴む。

武「せいの」

と起き上がる。

由実、隣で女の子を支えながら、二人を見る。

遠いところから若い夫婦がやってくる。

女の子「お母ちゃん、お父ちゃん」

武、女の子をおろす。

息を切らしながら、夫婦が近づいてくる。

女の子、両親へ飛んでいき、抱きつく。

夫婦、武と由実に礼をする。

男「ほんまにありがとうございました」

武「いいえ」

女「（娘に）せなちゃん、ありがとうは？」

女の子、二人にやつてくる。

女の子「高いけえ、せな、たわんよ」

武と由実、しゃがむ。

女の子、由実の頬にキスをして、武の頬にもキスをする。

女の子「ありがと」

由実と武「どういだしまして」

女の子、両親の元へ。

三人、振り返って歩いていく。

武と由実、見送る。

三人、止まる。

父、しゃがむ。

母、娘を父の肩に乗せる。

娘を肩車して、立ち上がる。

母、娘の背を支える。

三人、歩いていく。

武と由実、微笑んでいつまでも見送る。

木村家・寢室（夜）

それぞれの布団に寝ている武と由実。

由実、武に顔を向ける。

由実「今日は楽しかった。誘ってくれで、ありがとう」

武「こぢらごそ付き合っでくれて、ありがとう」

由実「……変だよ」

武「ん？」

由実「夫婦なのに、赤の他人みたい。いつからそういう風になっでしまっだんだべ」

武「……」

由実「……やっぱ夫婦っで、子供がいなくてだめだよ。だっで夫婦っで血が繋がってない。言っでみれば、赤の他人なもの。二人の血を分けだ子供がいれば、変な言い方だけど、つなぎ役をやっでくれる」

武「……そうがな」

由実「夫婦喧嘩の時、子供のためじゃなかつたら、お前と離婚するわっで決めセリフが

あるじゃない」

武「……なして俺ど離婚しねがったの？」

由実「たぶん、死んだあの子のためと思う。」

「私がいなくなっただがら、お父ちゃんとお母ちゃんが別れてしまった」あの子にそう思わせたくないから」

武「……由実が思ってるごと、もつと早く知りだがつた」

と由実をみつめる。

由実、武を見つめ返す。

武、布団を出て、由実の布団に入る。

武「……やり直すべ」

由実「……」

武、由実の顔に優しくキスする。

由実、武を抱きしめ、武にキスする。

熱くキスを交わす二人。

武、由実の服を脱がせて、自分の服も脱ぐ。

裸になる二人。

お互いの体を見つめる。

武、由実の首筋にキスして、由実の胸を優しく撫でて乳首を弄る。

由実、吐息が漏れ、武を見る。

立った乳首を、武、優しくなめる。

由実、目を瞑って、体を擦らせる。

武、舌で由実の体を這わせて、由実の股間に顔を埋める。

喘ぐ由実。

武、顔をあげて、由実にキスをする。

由実の股間へ手を伸ばす。

吐息が漏れる由実。

武、由実の上に乗る、由実の股を開いて、挿入する。

由実「あ……」

武、腰を振り始める。

由実、武の動きに合わせる。

武、動きが早まる。

由実、武の背中を強く抱きしめ、爪を立てる。

息が荒くなる二人。

武、動きがさらに激しくなる。

由実、目を瞑り、動きが早くなり、登り詰めていく。

果てる武、由実に覆い被さる。

顔を上げて、由実を見る。

息を切らしながら、微笑み合う二人。

公園（夜）

莉奈、ブランコに座ってゆっくりと漕いでいる。

隣のブランコに亮平が座っている。

莉奈「やっぱり自分を追い詰めんと、良いもの作れんのんかな」

亮平「……変なことを考えんたって」

莉奈、亮平を見つめる。

莉奈「うち、初めての相手は亮平くんがいい」

亮平「……急に何言い出すんじゃ」

莉奈「うちじゃ、だめなん？」

亮平「……そんなこと、考えたことないけえ」

莉奈、急に身を乗り出して亮平の頬にキ

入をする。

驚く亮平、身が固まる。

莉奈、すっと立ち上がり、亮平へ向かい、

亮平の膝を跨いで亮平と向き合うように、

亮平の膝の上に座る。

亮平「（驚いて）……」

莉奈、亮平を抱きしめる。

亮平、慌てて莉奈を突き飛ばして、その

場から逃げていく。

莉奈、地面に座って、逃げていく亮平を

見つめる。

莉奈「なんで……」

莉奈、ゆっくりと立ち上がり、ブランコ

に乗る。

莉奈「なんで……」

とブランコを漕ぎ出す。

突然、後ろから男の手で口を塞がれる。

男「黙れ。黙らないと殺すぞ」

莉奈を立たせて、地面に押し倒す。

莉奈、叫びだす。

男、莉奈の頭を殴る。

男「黙れ。黙らないと殺すぞ」

莉奈、叫ぶのをやめる。

男、莉奈のスカートをめくってパンツをおろして、莉奈に入る。

顔が歪む莉奈、歯を食いしばる。

涙がこぼれてくる。

男、果てて逃げていく。

莉奈、しばらく地面に寝たまま、死体のように動かない。

よろよると立ち上がり、パンツを戻して、ゆっくりと公園を出て行く。

カラオケスナック 『佳子』・表（夜）

佳子、店を閉めて振り返ると、歩いている莉奈が見える。

佳子「莉奈ちゃん？」

と莉奈へ向かう。

近づくと、うつむいている莉奈の服がしわしわに汚れているのに気づく。

佳子「どうしたの？」

莉奈、頭をあげて佳子を見る。

顔に痣ができている。

佳子に抱きつく。

佳子「大丈夫、もう大丈夫だよ」

と莉奈の背中を撫でつける。

病院・病室

ベッドで莉奈が寝ている。

伸一、直子と佳子、静かに出て行く。

同・廊下

直子、涙を拭き取りながら、

直子「莉奈のこと、誰にも言わんでくださ

い。お願いですから」

佳子「……」

王の部屋

ベッドで寝ている王。

ドアが叩かれる。

王、目が覚める。

王「（中国語）誰？」

趙の声「（中国語）俺」

王、起き上がり、電気を付けて、ドアを開ける。

趙、息を切らしながら、入ってくる。

王「（中国語）落ち着いて。どうした？」

趙「（中国語）……女の子をレイプした」

王「……」

趙「（中国語）前に見せた写真のあの子をや
つ

てしまった」

王、拳骨で趙を殴る。

趙、床に倒れ込む。

王「（中国語）馬鹿野郎」

趙に馬乗りになって殴りつける。

王「（中国語）あの子、まだ子供だぞ」

とさらに趙を殴る。

王「（中国語）俺たち、金の為にこの日本に
き

たんだよ」

趙「（中国語）… やめて… … やめて… …」

王、趙を放す。

趙、よろよると部屋を出ていく。

王、趙の背を見つめる。

江田島高校・教室

英語の先生、黒板で単語を書いている。

亮平、空席の莉奈の席を見ている。

鈴木家・莉奈の部屋

莉奈、天井を見つめている。

ベッドのそばの机に食べていないカレ

ーライスがある。

鈴木水産・表

岡田、王と立ち話をしている。

岡田「うちの趙から何か聞いとらんのか？

どこ行くとか」

王「いいえ」

岡田「そうか」

王「趙はどうしましたか」

岡田「おらんくなつた。困つたな」

鈴木家・階段

直子、ご飯を乗せたトレーを運んで階段を登っている。

莉奈の部屋のドアを叩く。

直子「ご飯よ」

直子、ドアを開けると、呆れる。

ベッドに莉奈がいない。

布団の上に手紙が置いてある。

直子、トレーを置き、手紙を手にする。

「この島が嫌だ」

直子、手紙を持って「お父さん」と叫びながら、飛び出していく。

カラオケスナック「佳子」(夕方)

店の電話が鳴る。

机を拭いている佳子、拭くのをやめ、電

話に出る。

佳子「もしもし」

公衆電話ボックス

莉奈「……佳子さん、お金を貸してくれませ
んか」

佳子の声「どうしたの？」

莉奈「家出をしたんです……」

カラオケスナック「佳子」

佳子「今どこにいる？」

莉奈の声「広島のアリスガーデン」

佳子「すぐ行くから、待ってて」

と電話を切り、財布を持って店を出て行
く。

広場（夜）

階段に座っている莉奈。

向かってくる佳子に気づくと、立ち上がる。

佳子、莉奈に近づくと、

佳子「バカ」

うつむく莉奈を見る。

佳子「ご飯食べた？」

莉奈、頭を振る。

ファミリーレストラン（夜）

佳子、ハンバーグを頬張る莉奈を見ている。

佳子「お金をもらった後、どうするの？」

莉奈「東京に行こうと思つとる……」

佳子「東京？ 東京でどう生きていくの？」

莉奈「東京に行けば、なんとかなると思う……」

……

佳子「なんとかなる？」

莉奈「うん」

佳子「バカじゃないの。なんともならないよ。」

東京に行ったあんたの将来が見え見えだわ。

駅で知らない男に話をかけられ、あんたは

そのまま、その男について行くでしょ。行

き先は大体風俗だね。最初の何年間はキヤ

バクラかデリヘルで、売れなくなったら、ソープかどこかに売り飛ばされる。客を喜ばせるために、何でもやらなければならぬ。本番とか。おしっこを飲まされる時もある。あんた、飲めるの？」

莉奈「……」

佳子「ぼろぼろになって、家に帰ったら、すべての金を貢いだ男がほかの女と寝てる。悲惨でしょ。泣きたくなっても、肩を貸してくれる人もいないんだよ。その時、あんたはきつと後悔する。家出をしなければよかった。でも、いくら後悔しても、家にはもう帰れない」

莉奈、机に突っ伏して泣き始める。

佳子「泣け、泣き終わったら、家に帰るのよ」
泣き続ける莉奈を見つめる。

フェリーの中（夜）

佳子と莉奈、並んで座ってる。

莉奈「佳子さん」

と佳子を見る。

佳子「ん？」

莉奈「外国人じゃった……うちを襲った人、日本語が変じゃった……」

佳子「……」

佳子、財布から黒人の赤ちゃんの写真を取り出して、莉奈に見せる。

莉奈「この子、誰なんですか」

佳子「私の子なの」

莉奈「……」

佳子「私も莉奈と同じ目にあつたことがあるんだ」

莉奈「……」

佳子「沖縄つて米軍の基地がいっぱいあるでしよ？ 16歳のとき、彼らに……それで、この子が生まれた」

佳子、写真を眺める。

佳子「でも、彼を見るたび、あの夜のことを思い出してしまう。辛くて辛くて、私、家を飛び出して東京に行った。それから、私

はもう沖縄に戻ることはなかった……」

莉奈「……その子、今、何歳ですか？」

佳子「16歳になる。あなたと同じ年なの」

莉奈「……会いたくないんですか？」

佳子「……」

佳子、窓外の海に目を向ける。

鈴木家・表（夜）

玄関先で両親と抱きあう莉奈。

遠いところで見守っている佳子。

カラオケスナック 「佳子」

ドアに張り紙が貼られている。

「閉店のお知らせ

平素は格別なるご愛顧を賜り……」

フェリーターミナル・棧橋

佳子、足元にスニーカーがある。

由実、佳子に弁当を渡す。

由実「お腹空いたら、食べてね」

佳子「ありがとう」

と頭をさげて、

佳子「お世話になりました」

由実「こちらこそ」

佳子「武さんと仲良くしてね」

由実「うん……」

佳子「……沖縄の方言、全然思い出せない」

由実、佳子を抱きしめる。

佳子、由実を抱き返す。

佳子「（由実の耳元に）これから、テレビで

沖

縄の基地反対デモのニュースがあつたら、
よく見てください。私、その先頭に立つて
るかもしれない」

由実「……（微笑む）」

佳子、由実を放して、スーツケースを引
いてフェリーに向かっていく。

由実、佳子がフェリーに乗るまで見送る。

突然、吐き気が襲ってくる。

由実、口に手を当て、トイレに駆け込む。

同・トイレ

個室からでてくる由実。

洗面台で水道水でうがいをする。

顔を上げ、鏡の中の自分を見つめる。

鈴木の家・表

玄関前に立っている直子と亮平。

直子「亮平君、せっかく来てくれたけど……」

手に握っているDVDを直子に渡す亮平。

亮平「これを莉奈ちゃんに渡してください」

直子、DVDを受け取る。

亮平、去っていく。

同・莉奈の部屋

莉奈、DVDをパソコンに入れる。

パソコンに亮平が写っている。

画面の中の亮平が喋りだす。

莉奈、見つめる。

亮平「莉奈ちゃん、早く元気になってください」

い。元気になったら、また一緒に映画を撮ろう。莉奈ちゃんが戻って来ないと、映画研究部が廃部になっちゃうよ」

画面の中の亮平、急に顔をぶち始める。

莉奈「……」

亮平「すみませんでした。俺、莉奈ちゃんのことが好きじゃ。前から好きじゃった。好きすぎて興味のない映画研究部に入った。じゃけえ、あの夜、急に怖くなって、逃げてしまった。本当に申し訳ございませんでした。俺にとって、莉奈ちゃんはこのつまらない島にある唯一の面白い存在。じゃけえ……じゃけえ……付き合ってください！お願いします」

画面の中で土下座している亮平を、莉奈、いつまでも見つめる。

コンビニ・トイレ

便座に座っている由実、手に握っている妊娠検査薬の棒を見ている。

赤紫色のラインが出ている。

道

由実、白いクジャクを見た畑にさしかかる。

見渡すが、クジャクの姿はいない。

由実、伊藤家に向かう。

庭にもクジャクの姿がない。

光子の声「何か探しとるん？」

由実、振り返ると、光子が家の前に立っている。

由実「あの、あのクジャクはどうになりましたか」

光子「先月、死んだんよ」

由実「……」

光子「（由実をじろじろ見る）あんたは誰？」

由実、答えずに去っていく。

木村家・玄関／仏間

すたすたと歩いてくる由実。

花瓶に差してあるクジャクの羽根を取り出して、庭に出る。

同・庭（夕方）

由実、クジャクの羽根を地面に置き、手で土を掘り始める。

指に擦り傷ができ、血が土に染みる。

由実、掘り続ける。

地面に細長い穴ができる。

由実、羽根をとり、穴に入れ、上から土を覆う。

いつの間にか来ている武、羽根を埋める由実を見下ろしている。

武「何しでんの？」

由実「……幸せが死んだ……」

武「……」

武、由実を支えて立たせる。

由実「……妊娠した……私、妊娠したの……」

武「本当に？ あの子、あの世で俺だちを見守っただ」

由実「……………」

武、顔が曇ってくる。

武「（うつむく由実を見て）誰の子なんだ」

由実「……………」

武「黙るなつて」

由実「……………王……………」

武「……………」

武、由実を手放して、去っていく。

取り残された由実、立ち尽くす。

王の部屋

王、武に突き飛ばされて床に倒れる。

武、王に馬乗りになって王の顔を殴る。

王、鼻血を抑えながら、

王「……………どうしました……………」

武「俺の女房ど寝やがっで……………」

と王にもう一発食らわせる。

王、手足をばたつかせてもがくが、武に
しっかり抑えられている。

武「俺から給料をもらって……………」

王の顔を殴る。

武「俺の女房を……」

ともう一発食らわせる。

王の顔がめっちゃくちゃになる。

由実、息を切らしながら入ってくる。

由実「やめて」

と武を引つ張るが、動かない。

武、さらに王を殴る。

由実「やめて……」

由実、武に抱きつくが、武に突き飛ばされる。

由実、床から起きて、包丁に気付く。

武、王を殴る。

王の顔が血まみれになっている。

由実、包丁を取って、武に向ける。

由実「……」

武、由実を見て、王を放す。

鈴木家・リビング

直子、掃除機をかけている。

テレビにニュースが流れている。

アナウンサー「昨日、広島市内のコンビニで
中国国籍の趙鵬容疑者が、強盗容疑で現行
犯逮捕されました……」

テレビに趙の顔写真が写っている。

直子、テレビを見ようともしない、掃除
を続ける。

莉奈、顔を出す。

莉奈「母さん、行ってくる」

直子「行ってらっしゃい」

莉奈、出ていく。

窓の外に小雪が降っている。

莉奈と亮平、手をつないで歩いていく。

直子、莉奈たちを見て、微笑んで、掃除
を続ける。

牡蠣祭り会場

小雪が舞い落ちている。

牡蠣料理を出す屋台が立ち並び、人々で
ごった返している。

軍手をはめている武、ナイフで焼いた牡蠣を開けて客に渡す。

腹が大きくなった由実、客におつりを渡している。

莉奈と亮平の番になる。

莉奈「こんにちは」

武「久しぶり」

莉奈「二つください」

と千円札を由実に渡す。

由実「奢るよ」

莉奈「ありがとうございます」

武、牡蠣を開けて亮平に渡す。

武「俺のドキュメンタリー、続きは？」

莉奈、微笑んで、亮平と去っていく。

堤防

莉奈と亮平、やって来る。

二人、堤防に登って座る。

亮平、箸で牡蠣の身を取って、莉奈に食べさせる。

莉奈、亮平に食べさせる。

莉奈「ねえ、今度、うちの映画の主演になつてよ」

亮平「俺？ つまらんよ」

莉奈「知つとる」

亮平「じゃ、ほかの面白い人に頼んでや」

莉奈「亮平くんじゃなきゃ、だめなの」

莉奈と亮平、見つめ合つて笑う。

牡蠣祭り会場

武、客に牡蠣を渡している。

王、片手でスーツケースを引いて、片手に大きな袋を提げていて、武の屋台に向かって来る。

武と由実、王に気付く。

王「お久しぶりです」

武「久しぶり。元気だった？」

王「はい」

由実、王を見ている。

武「中国に帰るのか」

王「はい。今日の飛行機です」

武「（王の袋に気付く）これ、なに？」

ミッキー・マウスのぬいぐるみの頭が袋からはみ出ている。

王「娘、ミッキー・マウスが好きです。これはプレゼントです」

由実、ミッキー・マウスを見つめる。

王、由実のお腹に気付く。

王「子供、できましたね」

由実「……」

武、由実のお腹を優しく撫でる。

武「俺、また父になるよ」

王「おめでとうございます。さようなら」

武「さようなら」

王、去って行こうとする。

由実、慌てて素手で網で焼いている牡蠣を掴むが、牡蠣の開け口から溢れている汁に触れて手を引っ込める。

熱さを我慢して、もう一回牡蠣を掴んで王に渡す。

由実「これ、食べなよ」

王「すみません。私は牡蠣を食べられません」

由実「……」

王、去って行く。

由実、牡蠣を握ったまま、王を見送る。

武、由実の手を掴んで、指を開かせ牡蠣を奪ってゴミ箱に捨てる。

武「ばか」

由実の指と手のひらが赤くなっている。

由実、テントの外へ手を伸ばして、降って来る雪を受け止める。

手のひらに落ちてきた雪の花がすつと溶けていく。

完